

生研 ニュース

PHOTO 倉科満寿夫



IIS NEWS
No.109
2007.12

●図書チーム
朝比奈伸一(前列左)
筒井 明子(前列右)
二宮 一郎(後列)

IIS
TODAY

今回表紙に登場していただいたのは、図書チームの皆様です。「自然科学系附置研の中で、蔵書16万冊は最大です。」と誇らしげに語るチームリーダーの朝比奈伸一さん（前列左）、「図書館を使うのが当たり前だった自分の恩返しのためにも働いています。」とにこやかに語る筒井明子さん（前列右）と、図書館の門番という大切な仕事をしげに語っていただきました。ただ、出版社から送られてくるジャーナル等が図書館を経由して学内便で送られてくるのは案外知られていません。

その日々の作業を始め、年毎の製本や分類カード作成など「最近では分類体系が難しいと感じる。」という二宮一郎さん（後列）。学問分野が細分化され、再び融合化される今日では、領域と境界の決定が難しいと思うのは、研究畑に最も近い図書チームならではでしょう。「LANなどの環境を整え、居心地の良い空間を提供したい。」図書館を大切に思う気持ちを感じました。

(小倉 賢)

As棟（旧45号館）の利用がスタートしました

長らくお待ちいたしましたAs棟（旧45号館）の改修工事がひとまず終わり、10月より皆様にご利用いただけることとなりました。As棟の改修計画の検討が開始されたのは2004年春で、その後、改修の基本計画の立案、耐震補強を主とした第Ⅰ期工事、内装・設備改修を主とした第Ⅱ期工事を経て、このたびの利用開始となりました。

As棟はその計画当初から、改修工事に先行して新築されたAn棟の機能を補完するように計画されており、As棟3階には大小セミナー室（計8室）および関連ユーティリティ（トイレ、コピー室、リフレッシュコーナーほか）を備え、こ

れをコンベンションホールを有するAn棟2階とブリッジで結ぶことにより、比較的規模の大きな会議等においてもパラレルセッションが運営できるように配慮されています。3階以外の各階には、化学系、機械系、情報系それぞれの仕様を想定した研究・実験室を配置しており、各種研究プロジェクトの展開にご利用いただけます。なお、セミナー室の整備に伴い、従来プレハブ棟2階を利用していた会議室もAs棟セミナー室の利用へ移行することになりました。移行後の部屋名称や利用方法の詳細については後述のとおりです。

なお、本改修工事にあわせて当初から

計画されていた新レストラン建設については、現在An棟ピロティ部分における工事が進んでいます。またその後、An棟-As棟間アトリウム部分を西側から約1/2にわたってブリッジ上部まで覆う幕屋根の設置工事が2008年1月末ごろの完成を目標に引き続き行われる予定で、2008年春には新レストランも営業開始の予定です。それまでは今しばらくご不便をおかけすることになりますが、来春の更なる機能の充実が実現するまで皆様よろしく御協力のほどお願いいたします。

（キャンパス構想専門部会長
中壱 良昭）

会議室等 再配置

※1 防災対策本部を兼ねる。 ※2 会議室予約システムにのせる。

旧呼び名	人数	新しい呼び名	英語表記	人数	場所	面積	備品・設備
コンベンションホール	257	コンベンションホール	Komaba Convention Hall	257	An-202	—	常設マイク/プロジェクタ(200)/電動スクリーン/音響(ビデオカメラ)
ホワイエ		ホワイエ				—	常設マイク/音響/プラズマTV
大セミナー室	84	大セミナー室	Main Seminar Room	84	Dw-601	213m ² (通路込み)	常設マイク/プロジェクタ(100)天井/電動スクリーン/音響/ホワイトボード
中セミナー室	96	中セミナー室1	Medium Seminar Room 1	96	An-401・402	133m ²	常設マイク/プロジェクタ(100)天井/電動スクリーン
第3会議室(食堂2F)	72	中セミナー室2	Medium Seminar Room 2	48	As-301・302	96m ²	常設マイク/プロジェクタ(100)天井/電動スクリーン/ホワイトボード/OHP/ビデオ/モニタ
第7会議室(食堂2F)	30	中セミナー室3	Medium Seminar Room 3	40	As-303・304	72m ²	常設マイク/プロジェクタ(100)天井/電動スクリーン/ホワイトボード/OHP
第4会議室(食堂2F)	63	中セミナー室4	Medium Seminar Room 4	48	As-311・312	96m ²	常設マイク/プロジェクタ(100)天井/電動スクリーン/ホワイトボード/OHP
第8会議室(食堂2F)	30	中セミナー室5	Medium Seminar Room 5	40	As-313・314	72m ²	常設マイク/プロジェクタ(100)天井/電動スクリーン/ホワイトボード/OHP
小セミナー室1	36	小セミナー室1	Small Seminar Room 1	36	An-403	67m ²	常設マイク/プロジェクタ置型/電動スクリーン/ホワイトボード
小セミナー室2	36	小セミナー室2	Small Seminar Room 2	36	An-404	67m ²	常設マイク/プロジェクタ置型/電動スクリーン/ホワイトボード
第5会議室(食堂2F)	30	小セミナー室3	Small Seminar Room 3	18	As-305	48m ²	スクリーン/ホワイトボード/OHP
なし		小セミナー室4	Small Seminar Room 4	15	As-306	36m ²	ホワイトボード
第6会議室(食堂2F)	30	小セミナー室5	Small Seminar Room 5	18	As-309	48m ²	スクリーン/ホワイトボード/OHP
なし		小セミナー室6	Small Seminar Room 6	15	As-310	36m ²	ホワイトボード
大会議室	100	大会議室	Main Conference Room	100	An-301・302	198m ²	常設マイク/プロジェクタ置型/電動スクリーン/音響/ホワイトボード/プラズマTV/著画カメラ
第2会議室(笠岡ラウンジ)	20	第2会議室(笠岡ラウンジ)	Conference Room 2	20	C-ラウンジ	56m ² (テーブルエリア) 56m ² (応接エリア)	スクリーン/ホワイトボード
第11会議室	30	第3会議室	Conference Room 3	30	Fw-701・702	90m ²	スクリーン/ホワイトボード
第14会議室	18	第4会議室 ^{*1}	Conference Room 4	18	De-104	40m ²	スクリーン
小会議室1	20	小会議室1	Small Conference Room 1	20	An-405	67m ²	プロジェクタ置型/スクリーン/ホワイトボード
小会議室2	20	小会議室2	Small Conference Room 2	20	An-406	67m ²	プロジェクタ置型/スクリーン/ホワイトボード
小会議室3	20	小会議室3	Small Conference Room 3	20	An-407	67m ²	プロジェクタ置型/スクリーン/ホワイトボード
E棟ラウンジ	30	E棟ラウンジ					
打ち合わせ室		第1輪講室 ^{*2}	Colloquium Room 1		FF-2c	10m ²	
打ち合わせ室		第2輪講室 ^{*2}	Colloquium Room 2		FF-5c	15m ²	
第12会議室		研究室に転用			FF-3c	12m ²	
第13会議室		研究室に転用			FF-4c	12m ²	
打ち合わせ室		研究室に転用			FF-6c	12m ²	

大規模複合機能集積マイクロ・ナノシステム若手研究者国際交流プログラムの開始

平成19年10月よりマイクロメカトロニクス国際研究センター（CIRMM）を運営母体として、若手研究者の5カ年国際研修プログラムが発足した。本プログラムは日本学術振興会の若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム（ITP）事業の採択によるものである。大学院生（修士、博士課程）、博士研究員、および、助教を派遣対象とした数ヶ月から1年間の海外研修プログラムや、海外パートナー機関との共同開催

ワークショップ、国際スクールなどを通して、将来の日本の科学研究を担う若手研究者を育成する。CIRMMではこれまでに、フランス国立科学研究センター（CNRS）との国際共同運営組織LIMMSの活動を始めとして、海外からのべ80名以上の外国人研究者を受け入れてマイクロ・ナノメカトロニクス関連の国際共同研究を推進してきた。また2005年度には、CNRSに加えてローザンヌ工科大学（スイス）、フライブルグ大学（ドイツ）、

VTTエレクトロニクス（フィンランド）、ソウル国立大学（韓国）との国際研究交流ネットワークNAMISを運営している。今回のプログラムはこれらのCIRMMの研究交流ネットワークを活用して日本から海外に若手研究者を派遣し、国際的に通用する研究者を育成することを目的としている。

（マイクロメカトロニクス国際研究センター 年吉 洋）



グラスゴー大学との学術交流協定調印式



表記調印式が10月22日(月)午後1時より総長室にグラスゴー大学のサー ミュアー ラッセル学長を迎えて執り行われた。東大側の出席者は小宮山宏総長の他に、幹事部局の生研から前田正史

所長、今回の協定幹事の木下健教授、交流部局である先端研の宮野健次郎所長、情報学環の吉見俊哉学環長、山内祐平准教授、工学系の川村隆文准教授が参加した。ラッセル学長から小宮山総

長のアクションプランについて賛意が述べられ、グラスゴー大学でも良く似たプランの下に改革を進めていることが述べられた。東大側の関連部局の参加者から今までのグラスゴー大学との交流とともに今後の交流課題について説明された。今回の調印式に続き12月13日にグラ

スゴー大学の国際交流担当副学長とともに交流部局の部局長数名が東大を訪れ、議論される具体的個別の交流への期待が確認された。

(機械・生体系部門 木下 健)

大連理工大学との学術交流協定調印

大連理工大学との交流協定更新の覚書交換式が大連理工大学にて行われました。大連理工大学は今年から工学系研究科とも交流協定を結ぶことになっており、工学系からは六川国際交流委員長が、また生産技術研究所から渡辺正副学長が出席いたしました。生研と大連理工大学との交流協定は1987年に締結されたもので、生研として第1号の交流協定であり、これは被害実数30万人に達するとされる1976年7月28日の唐山地震に関する共同学術調査がそのきっかけになっています。大連理工大学の欧学長からは、地震工学に限らず今後さらに

様々な分野で交流を深めることが、急速に変貌しつつある社会へ質の高い科学技術を提供することにつながるとし、生研、工学系との交流への強い期待が示されました。覚書交換式のあとの特別講演では、

小長井が最近の地震被害に見られる共通した特徴と、記録集約のプロジェクト(振興調整費重点課題研究：土木学会)の紹介を行いました。

(基礎系部門 小長井 一男)



左から6人目 大連理工大学の欧学長

タイ王国科学技術フェア開催

2007年8月8日から19日にかけて、タイ王国科学技術フェアがバンコク都内のBITECにて開催された。タイ国内の民間企業、政府機関が一堂に会し、地球環境、エネルギー問題、気候変動、宇宙開発、食糧問題、水問題などに関連する最新技術が展示された。本年は、タイ国王陛下御生誕80年及び日タイ修好120周年という大変慶祝すべき年

にあたり、東京大学を代表して生産技術研究所が、特別に設置された日本コーナーにてブースを出展した。都市基盤安全工学国際研究センター（ICUS）の目黒公郎教授、RNUS（アジア工科大学院／AIT）の竹内渉講師、Raktipong Sahamitmongkol 博士、Kawin Worakanchana 博士、国際交流チームの大島潤二氏、連携研究支援室の新井

宏之氏の主導のもと、タッチパネル式の地震災害軽減効果表示システム、赤外線カメラを利用した非破壊式コンクリート構造物劣化診断システムなど、都市基盤安全工学に関連する最新技術を披露した。8月10日に行われた開会式では、科学技術に造詣の深い、タイ王国シリントーン王女殿下がご視察をなされ、およそ20あった日本コーナーのうち、最初



写真左より Raktipong Sahamitmongkol 博士、竹内渉講師、目黒公郎教授、Kawin Worakanchana 博士

に東京大学のブースにお立ち寄りになり、目黒教授と Worakanchana 博士による説明に熱心に耳を傾けてメモをとられた。その様子はタイ国内の新聞・テレビはもちろんのこと、日本のNHKの国際放送でも大きく取り上げられた。会議の期間中、全国から小中学生を中心に予想を遙かに上回る多くの来客を数え、主催者側発表で来客者数100万人を突破し大盛況であった。本フェアを通じて、科学技術大国への仲間入りを果たそうというタイ王国の強い決意が感じられ、科学技術を通じた日タイの良好な協力関係継続の重要性を再認識した。

(人間・社会系部門 竹内 渉)

WATCH

生研からの展望



生研記者会見報告

9月20日臨時記者会見

鹿児島湾にて最新鋭海中ロボット「ツナサンド」が熱水チムニーと熱水湧出を多数発見、さらに、「トライドッグ1号」がサツマハオリムシコロニーの全体を写真撮影に成功

海中工学研究センター長
浦 環教授発表

9月20日10:30よりAn棟大会議室において、東京大学海洋研、岡山大学と共同で実施した淡青丸KT-07-20次研究航海（2007年8月16～26日、鹿児島湾）における海底調査について記者会見を行った。

今回の調査では、桜島の北東約5kmの海底に位置する「若尊火口」（2003年、気象庁が活火山に指定）北西部の200m深度域に海中ロボット「ツナサンド」を

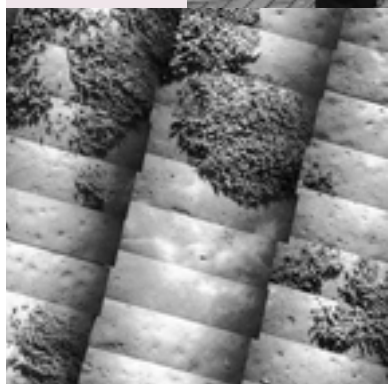
潜航させ、海底の4カ所から激しく熱水が湧出しているのを発見し、詳細なビデオ撮影に成功した。その内の1カ所には金属性の沈殿物が煙突状に成長した高さ3mにもおよぶ熱水チムニーが形成されていた。これほど浅い海底で熱水チムニーが見つかったのは世界初である。

また、同湾北西部のハオリムシサイト（深度100m）では、「トライドッグ1号」が30m×80mの海底面を全自動で写真

撮影を行って面的な画像マップを取得し、サツマハオリムシのコロニーの全貌を明らかにした。

今後、更なる調査によって、鹿児島湾の海底活動の全貌を明らかにしていく予定である。また、会見の内容は日経新聞、毎日新聞、朝日新聞等で詳しく報道された。

（海中工学研究センター 浦研究室
博士2年 中谷 武志）



ハオリムシサイトの画像マップ
（5m四方）



発見したチムニーと
熱水噴出孔

生研記者会見報告

9月14日臨時記者会見

電流駆動で初めて1・55μm帯単一光子発生に成功 量子暗号通信の実用化に大きく近づく

9月14日に先端科学技術研究センター教授会室で、ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構の荒川泰彦教授らは富士通研究所との共同研究成果を発表する記者会見を開催した。情報通信ネットワークの安全性が求められる中、最強の暗号といわれる量子暗号通信の性能な

どを飛躍的に高める「電流駆動で初めて1・55μm帯単一光子発生に成功」に関する記者発表を行った。微弱な単一光子を情報の担い手とする量子暗号通信では、最低損失の1・55μm帯で、制御性がよい電流駆動による単一光子発生器の実現が課題だった。

先端科学技術研究センター／生産技術研究所
荒川 泰彦教授発表

すでに荒川教授らと富士通研の共同研究グループは2005年に1・55μm帯で光励起による単一光子発生に先駆け、今回、さらに電流駆動に成功したもの。これによって量子暗号通信技術は大容量化、小型・低消費電力化や、集積化への道が開け、量子中継を含む、より高度な量子暗号システムの構築にもつながると期待される。

記者会見では、この技術の意義や実用化時期などについて、詳しく説明が行われた。早朝の記者会見にもかかわらず、多数の記者が出席し、技術の波及効果について日経産業新聞、日刊工業新聞など多数の新聞に報道された。

(振興調整費特任研究員 男沢 宏也)

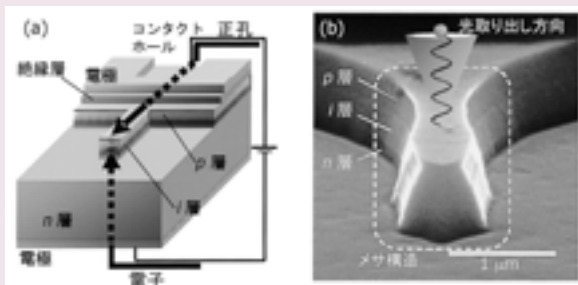


図1 電流注入による単一光子発生を実現する量子ドットLED (単一光子発生器)
(a) デバイス構造略図 (b) デバイス構造SEM (走査電子顕微鏡) 像

UROP 研究発表会

9月27日に、平成19年度夏学期生研UROP (Undergraduate Research Opportunity Program) の発表会が催されました。本プログラムは大島まり教授、鈴木高宏准教授がコーディネータとなり、教養の学部1、2年生を対象に、実際に大学院の研究室に所属して研究を体験してみようという全学自由研究ゼミナールです。(詳しくはUROPのHP: <http://www.oshimalab.iis.u-tokyo.ac.jp/UROP/>を参照下さい)

本学は11名が受講し、それぞれ生研内の研究室に所属して、半年に渡り様々な研究を実施してきました。さらに、大島教授、鈴木准教授が情報学環の職も兼ねている事から、今回は初めて学環の先生にも受け入れ研究室としてご協

力いただきました。

今回も例に違わず珠玉の発表が目白押しで、わずか半年、しかもまだ専門科目も履修していない学生さんなのに！ といった高度な内容ばかりに驚きました。そして、それぞれが楽しんで研究に取り組み、笑いあり、涙あり(?)の名発表ぞろいでした。

発表会後はこれまた新しい試みとして、ささやかな交流会を開きました。実は受講生達は最初のガイダンス以降、この発

表会が再会する唯一の場であり、お互いの健闘(?)を称え合うとともに、貴重な体験を共有する良い機会となったと思います。

このUROPが参加学生の大学生活の選択肢をより広げることを願っています。

(機械・生体系部門 大島研究室
大石 正道)



盛況だったナノ量子情報エレクトロニクスシンポ 約320名が参加、両日とも満席で埋まる

ナノ技術、量子科学、ITを融合したナノ量子情報エレクトロニクス研究の最前線を公開する「ナノ量子情報エレクトロニクスシンポジウム」が東大ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構の主催で、10月24、25の両日、駒場・数理科学研究科棟大講義室で開かれた。機構発足から1年の研究成果のお披露目とあって、同シンポには、約320名が参加し、両日とも会場は満席状態で、関心の高さが伺われた。

シンポジウムは前田正史生産技術研究

所長の開会挨拶で幕を開け、岡村定矩副学長の挨拶、文部科学省の行川浩史戦略官の来賓挨拶、荒川泰彦機構長の基調報告などのほか、午後には目玉となった特別セッションで、奥村直樹総合科学技術会議議員が「我が国の科学技術政策とイノベーション創出」、小宮山宏総長が「ものづくり『課題先進国』日本」と題してそれぞれ特別講演を行った。続いて東大企業ラボ4社の協働企業責任者によるパネル討論「産学連携への期待」が行われ、会場からは江崎玲於奈先生

も登壇して発言するほど、充実した討論となった。

特別セッションの他、2日間に渡り、全教員による講演および若手研究者のポスターセッションで、機構の研究推進の全貌が明らかにされた。いずれも1年間という短期間ながら、研究成果の数々が迫力をもって示されたシンポジウムであった。

(振興調整費特任研究員 男澤 宏也)

「日本は課題先進国」と講演する
小宮山総長



懇談会は江崎先生の乾杯の音頭で始まる



パネル討論で産学連携への期待を述べる協働企業責任者

外国人研究者・留学生との懇談会

10月24日の夕方に、駒場リサーチキャンパスのユニバーシティ広場にて、外国人研究者・留学生と国際交流を促進する目的で、生研主催の「外国人研究者・留学生との懇談会」が開催されました。天候に恵まれたこともあり、参加者はボランティアを含めて約450名と大盛況でした。

例年通り、国際色豊かな各国の食事を

屋台で提供する形式で行われ、今回は全部で7つの屋台（インド・パキスタン、インド、フランス、インドネシア、中国、日本2つ）が出店されました。各屋台に長蛇の列ができ、本場のカレー、餃子、クレープなどを楽しむことができました。また、フランス屋台では「ペタンク」という金属のボールを使って行うフランスのスポーツのデモも行われ、好評を博し

ていました。

本懇談会は、5名の実行委員と3名の事務部・国際交流チームの企画のもと、100人以上の教職員・学生ボランティアによって実行されました。関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

(実行委員長 高宮 真)



2007年度「社会人のためのITS専門講座」 千葉実験所にて開催される

国際・産学共同研究センター（CCR）主催、先進モビリティ連携研究センター（ITSセンター）と（財）生産技術研究奨励会の共催で2007年度「社会人のためのITS専門講座」が9月20日に千葉実験所で開催されました。本講座は2003年度から進められているCCR産学連携プロジェクト「サステイナブルITSプロジェクト」における成果を広く紹介すること、ITS分野の人材育成を目的としております。2004年度の第1回からこれまで年一回、駒場リサーチキャンパスにて開催されており、千葉実験所での開催は今回が初めてとなります。

当日は渡部俊也国際・産学共同研究センター長と池内克史先進モビリティ連携研究センター長の開講挨拶に始まり、午前から夕方にかけてITSセンターのコ

アメンバーとサポートメンバーによる「ITS複合現実感交通実験スペースの展開」（機械・生体系部門 須田義大教授）、「小型キャパシタEVでライフスタイルを変えよう！」（情報・エレクトロニクス系部門 堀洋一教授）、「サステイナブルITSの展開研究」（都市基盤安全工学国際研究センター 田中伸治講師）、「車両運動制御のための路面状況計測手法について」（日本大学 景山一郎教授）、「WYSIWYASナビゲーション実例とそのバックボーンとしてのシステム創成論」（埼玉大学 長谷川孝明教授）、「交差点の安全性向上へ向けた記号化の提案」（首都大学東京 大口敬教授）の各講義が行われました。須田義大千葉実験所長の閉講挨拶で本講座は終了し、引き続き前田研究室・須田研究室・岸研究室

と海洋工学水槽の4箇所を回る見学会を行いました。

本講座には定員を超える多数の参加申込があり、当日は87名が受講、千葉実験所事務棟1階の大会議室は多くの受講者で席が埋まりました。講義中は講師の話に熱心に耳を傾け、資料にメモを取る受講者の姿が多く見られました。本講座がITSの研究開発やITSを担う人材育成の一助となれば幸いです。

最後に、本講座を行うにあたり多くのご協力をいただきました千葉実験所事務室の皆様、研究施設見学にご対応いただきました皆様がこの場を借りて御礼申し上げます。

（機械・生体系部門 山口 大助）



生研建物の地震モニタリングシステムの導入

都市基盤安全工学国際研究センター(ICUS)では、IT強震計による生研建物の地震時挙動モニタリングシステムを導入しました。生研建物は、B・C・D棟とE・F棟、および高層棟(西側)と中層棟(東側)の4つに分けられます。これらの建物の地震時の挙動を把握するため、B1・2・4・6・8階の共有スペースに合計18個のIT強震計を設置しました。測定されたデータは、LANを介

してICUSモニタリング室内のサーバーに転送され、各階での揺れをリアルタイムに把握することができます。

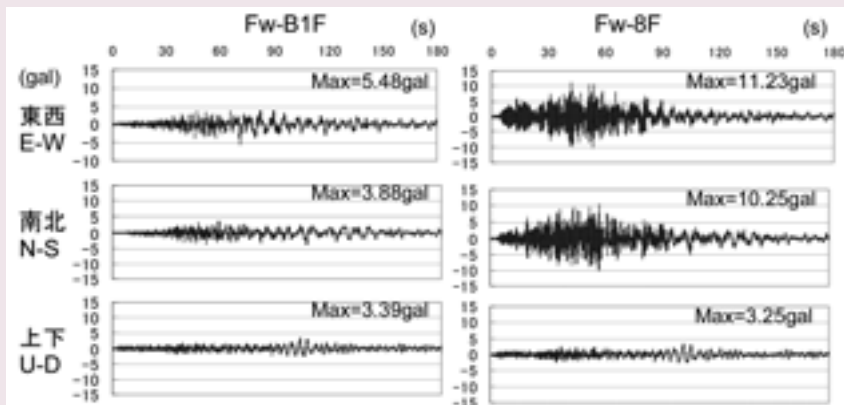
2007年7月16日午前10時13分に発生した新潟県中越沖地震の際に、現地で観測された最も大きな揺れは震度6強でした。下記の図は、F棟の地下(左)と8階(右)で観測された地震動です。地下での揺れは震度2(計測震度2.3)、8階では震度3(計測震度2.8)となり、

高層階で大きな揺れが観測されています。下記のHPで、建物の揺れのモニタリング状況と地震時に各強震計で計測された揺れを公開しています。過去の地震の際の生研建物の変形をアニメーションで表示した画像も閲覧できます。ぜひご覧ください。

<http://icus-eq.iis.u-tokyo.ac.jp/>
(都市基盤安全工学国際研究センター
大原 美保)



建物の変形表示



F棟地下(左)と8階(右)で観測された地震動

総長とのアクション・プラン懇談会

9月19日(水)午後4時から、総合研究実験棟(An棟)コンベンションホールにおいて、小宮山総長をお迎えし、「時代の先頭に立ち、世界の知の頂点を目指す東京大学」を実現するための重点

項目を取りまとめた「東京大学アクション・プラン2005-2008」について、総長自らが生産技術研究所の教職員に向けて説明する機会として懇談会が開催されました。

懇談会には、小宮山総長、山田理事が出席され、130名を超える教職員が参加しました。前田所長の司会により、開催趣旨について山田理事から説明の後、小宮山総長より、「課題先進国」日本、知識の爆発的増大が背景としてあり、「自律分散協調系」「知の構造化」をキーワードに、総長としての決意表明でもある東大発の大学モデル「アクション・プラン」について熱く語っていただき、また、パワーポイントを使いながら教職員にも分かりやすくご説明いただきました。その後、予定された時間一杯まで大変活発な質疑応答がなされました。

(総務課長 大西 淳彦)



第13回 ICUS オープンレクチャー 「都市基盤の安全のために—危機管理・防災と情報」開催される

2007年10月2日、東京大学生産技術研究所にて都市基盤安全工学国際研究センター（ICUS）主催の第13回ICUSオープンレクチャー「都市基盤の安全のために—危機管理・防災と情報」が開催された。今回は、都市基盤の安全のために情報が果たす役割に焦点をあてて、産官学の専門家をお迎えしご講演いただいた。まず、森川博之氏（東京大学先端科学技術研究センター教授）より、『ユビキタスが拓く安心・安全ICT基盤』：安全・安心ICT基盤の構築を支援する

ユビキタスネットワーク技術の挑戦的研究課題、研究開発事例、果たすべき役割の紹介がなされた。次に、東方幸雄氏（東日本電信電話（株）災害対策室長）より、『NTTグループの災害対策—災害・防災に活かす情報通信技術—』：過去の災害を教訓としたNTTグループの防災対策、新潟県中越沖地震への対応、首都直下地震への備え、および災害時の情報通信の活用策や情報通信技術の紹介、および情報通信の視点からの事業継続およびパニックや二次災害の防止につ

いての提言がなされた。最後に、上原美都男氏（横浜市危機管理監）より、『横浜市危機管理戦略について』：災害、大規模事故及び大規模事件などが引き起こす様々な危機に対する横浜市の準備と対策の紹介があった。講演参加者136名、懇親会参加者57名と本分野に対する関心の高さが伺えた。

（都市基盤安全工学国際研究センター
宮崎 早苗）



森川博之氏



東方幸雄氏



上原美都男氏

東京大学職員永年勤続者表彰式

平成19年度東京大学職員永年勤続者表彰式が11月22日（木）に本部棟12階大会議室で行われました。

小宮山総長からの祝辞の後、本年度被表彰者の代表に表彰状と記念品が授与されました。

本所の被表彰者6名は、総務課加藤淳副課長、今村泰代係長、三浦藤明係長、経理課木下誠一係長、情報・エレクトロニクス系部門平川研究室大塚由紀子助教、基礎系部門渡邊研究室土田茂宏技術専門職員でした。

（人事・厚生チーム 加藤 洋一）



「第3回駒場キャンパス技術発表会」開催される

10月26日(金)、大学院総合文化研究科18号館ホールを会場に、技術発表会が開催された。これまで生研を会場として開催してきたが、今年は共催し相手である総合文化研究科のある駒場Iキャンパスに会場を設け開催した。

発表会当日は開会が近づくにつれ風雨が強まってきたこともあり、参加者の出

足を心配したが、いざ発表が始まると聴講者も熱心に聴き、発表に対する質疑や討論も熱心に行われた。

今年特に感じたのは、登壇された皆さんが発表慣れしている事である。この技術発表会は学会と違い専門知識を持ち合わせない聴講者が多いにも関わらず、聴講者に理解されやすい話し方やテンポであった。技術職員の仕事にはなかなか表現することが難しい内容が多いが、実に心遣いのある発表であった。

恒例となった招待講演では物性研究所の技術職員が、強磁場

研究の「現状と将来計画」について講演し、また特別講演では日本電産コパル株式会社の研究員による「光学要素技術」について講演があった。

今年は従来行っているメールや技術報告集の事前送付での開催通知方法以外に、産学連携本部ホームページへの掲載、および協賛企業への通知していただけることになり、慶應義塾大学の技術職員のほか、企業からも参加を得られた。

例年優秀な発表に対して贈られる所長賞は、鶴達郎さんの「固体表面の話」、西山祐司さんの「STLデータを利用した5軸マシニングセンタによる多面加工」が選ばれた。

今年も企画段階から開催に至るまで、多くの技術職員のご協力をいただき、心から感謝申し上げます。

(技術発表会実行委員長
谷田貝 悦男)



PERSONNEL

■ 着任のご挨拶

附属都市基盤安全工学国際研究センター
客員教授

横田 弘



11月1日付けで都市基盤安全工学国際研究センター客員教授として生産技術研究所の一員に加えていただきました。現在勤務しております独立行政法人港湾空港技術研究所において、コンクリート構造の性能照査や構造物のライフサイクルマネジメントなどの研究に従事してきました。生産技術研究所の使命であると考えている現場技術からの学問体系の構築という視点から研究を進展させ、都市基盤施設の性能評価の実現に向けた努力をしていきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

物質・環境系部門 准教授

火原 彰秀



10月1日付けで物質・環境系部門の准教授に着任いたしました。専門は分析化学です。マイクロ流体を用いた分析化学操作の集積化、およびマイクロ流体中の物理・化学現象を追跡する顕微分光法の開発に取り組んでいます。生産技術研究所の先生方との交流から、研究が大きく発展することを期待しています。よろしくご指導の程お願い申し上げます。

PERSONNEL

昇任のご挨拶

ナノエレクトロニクス連携研究センター
特任准教授

中岡 俊裕



11月1日付けで、ナノエレクトロニクス連携研究センターの特任准教授に昇任させていただきました。専門はナノエレクトロニクスおよび固体物理です。これまで、量子ドットに代表されるナノ構造を用いて、電子の電荷、電子スピン、励起子などの素励起を1個単位で制御することに取り組んでまいりました。今後、量子情報の担い手になりうるそれら素励起間の量子状態転写技術と量子情報処理デバイスへの応用に挑戦していきたいと考えております。今後ともいっそうのご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

復帰



●総務課副課長
加藤 淳

配置換



●総務課一般職員
(総務・広報チーム)
伊熊 正則



●経理課一般職員
(予算執行チーム)
野田 純平

人事異動

教員等

(退職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
19.9.30	清田 隆	辞職	—	助手 人間・社会系部門
19.10.15	陳 宏	辞職	—	助教 人間・社会系部門
19.10.31	小松 邦紀	辞職	—	助手 情報・エレクトロニクス系部門

(学内異動)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
19.10.1	火原 彰秀	昇任	准教授 物質・環境系部門	講師 大学院工学系研究科

(特任教員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
19.9.30	寺坂 晴夫	辞職	—	産学官連携研究員・特任教授
19.11.1	望月 和博	採用称号付与	特定プロジェクト研究員・特任准教授	寄付講座教員・客員准教授
19.11.1	中岡 俊裕	採用称号付与	特定プロジェクト研究員・特任准教授	特定プロジェクト研究員・特任講師
19.11.1	李 善默	称号付与	特定プロジェクト研究員・特任助教	特定プロジェクト研究員
19.11.1	津田 行子	称号付与	特定プロジェクト研究員・特任助教	特定プロジェクト研究員

(兼務教員)

発令年月日	氏名	異動内容	兼務職名・所属	本務職名・所属
19.11.1	岩本 敏	兼務	准教授 情報・エレクトロニクス系部門	准教授 先端科学技術研究センター

(客員部門)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	本務職名・所属
19.11.1	横田 弘	委嘱称号付与	講師(客員教授) 附属都市基盤安全工学国際研究センター	研究主監兼 LCM 研究センター長 独立行政法人港湾空港技術研究所

事務系

(復帰)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
19.10.1	加藤 淳	復帰	総務課副課長	宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究本部科学推進部 庶務課副課長

(学内異動(出))

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
19.10.1	鈴木 隆人	配置換	地震研究所 研究支援チーム	総務課一般職員(総務・広報チーム)
19.11.1	小澤みどり	昇任	柏地区数物連携宇宙研究機構事務部門 国際交流係長	総務課主任(国際交流チーム)

(学内異動(入))

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
19.10.1	伊熊 正則	配置換	総務課一般職員(総務・広報チーム)	教育・学生支援系 留学生支援グループ 留学生支援チーム
19.10.1	野田 純平	配置換	経理課一般職員(予算執行チーム)	財務系 資産経営グループ 資産会計管理チーム

(所内異動)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
19.10.1	今村 泰代	勤務換	総務課係長(人事・厚生チーム)	総務課係長(総務・広報チーム)

(休職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
19.9.13	佐藤 綾子	休職更新	総務課一般職員(人事・厚生チーム)	—
19.10.13	佐藤 綾子	休職更新	一般職員 総務課(人事・厚生チーム)	—
19.11.1	星野 佳也	休職更新	係長 附属千葉実験所事務室	—

(復職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
19.11.1	佐藤 綾子	復職	一般職員 総務課(人事・厚生チーム)	—

ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構

(特任教員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
19.10.1	濱屋 宏平	採用称号付与	科学技術振興特任教員・特任助教	—
19.10.31	尾張 正樹	辞職	—	科学技術振興特任教員・特任助教

外国人研究者講演会

主催：(財)生産技術研究奨励会

9月19日(水) 司会：教授 田中 肇

Dr. Stephen R. Williams
Postdoctoral Fellow Research School of Chemistry, The Australian National University, Australia
NONEQUILIBRIUM FREE ENERGY AND FLUCTUATION THEOREMS : BASIS AND APPLICATIONS

9月25日(火) 司会：准教授 羽田野 直道

Dr. Kamran Bhenia
上級研究員 Ecole Supérieure de Physique et de Chimie Industrielles, CNRS, France
NERNST-ETTINGSHAUSEN EFFECT IN ELEMENTAL BISMUTH ACROSS THE QUANTUM

9月25日(火) 司会：教授 桜井 貴康

Dr. Ali Keshavarzi
Senior Research Scientist, Intel Corporation, USA
DIGITAL CIRCUITS WITH CARBON NANOTUBE TRANSISTORS

10月29日(月) 司会：教授 沖 大幹

Prof. Wilfried Brutsaert
W.L.Lewis Professor of Engineering, School of Civil and Environmental Engineering Hollister Hall Cornell University, USA
HAS GLOBAL DIMMING CAUSED A SLOWDOWN OF THE HYDROLOGIC CYCLE?

11月7日(水) 司会：教授 田中 肇

Prof. Frederic Nallet
Centre de recherche Paul-Pascal, CNRS and Bordeaux-1 Université, France
STRUCTURE OF DIBLOCK COPOLYMER SYSTEMS IN THE PRESENCE OF TWO LOW MOLECULAR WEIGHT, IMMISCIBLE AND SELECTIVE SOLVENTS

11月7日(水) 司会：准教授 大岡 龍三

Prof. Wilhelm Kuttler
The University of Duisburg-Essen, ドイツ
CURRENT RESEARCH IN URBAN CLIMATOLOGY-RESULTS OF CO2 AND PARTICULATE MATTER MEASUREMENT CAMPAIGNS



ドイツ・ポツダム・マックスプランク研究所潜入記

マイクロメカトロニクス国際研究センター 竹内研 修士2年
中村 元

私は現在、イアエステ(国際学生技術研修協会)の国際インターンシッププログラムでドイツのポツダムにあるMax Planck Instituteにて半年間のインターンシップを行っています。ドイツ生活も残り1ヶ月なのですが、毎日刺激的な生活を送っています。そこで今回は、こちらに来て日本と違って面白いと感じたところをいくつかレポートしてみたいと思います。

まず研究所に関して…

- ・職員の方はもちろん、学生も夕方5時になると帰ってしまいます。さらに金曜は3時半から帰り始めます(笑)その代わり、研究室にいる間は皆集中して仕事をしています。こちらの人は家族との時間や自分の時間をとても大切にしているようです。
- ・沢山のテクニシャンの方がいて、研究所全体で作業分担がしっかりなされています。例えば、バッファー(溶液)だけ作る人、オートクレーブ(滅菌処理)だけする人、実験器具を洗う人(!)、という具合です。研究者は(学生ももちろん)、実験器具を洗わなくていいのです。研究者にとって、とてもありがたい環境です。
- ・研究所全体で集まってのティータイムがあったり、研究室内でちょっとしたお祝い事があると朝からシャンパンを飲んだりします。さらには、昼食でビールを飲む人も。それでもしっかり仕事をするので、さすがドイツ人です。

ドイツ生活に関して…

- ・ビールは水より安いです。どれが美味しかったのか覚

えきれないくらい沢山の銘柄があります。ポテトとソーセージは本当によく出てきます。あまり知られていませんがドイツはパンがすごくおいしいです。

- ・駅に改札がありません。電車の中ではたまに検札が回って来るのですが、地下鉄の中では検札すらありません。法律を守るドイツ人の律儀な気質ゆえ、成り立つシステムなのでしょう。
- ・スーパーのレジや駅窓口のおばちゃん達は何故かいつも不機嫌です。

あと残り1ヶ月となったドイツ・マックスプランク研究所での生活ですが、とにかく(しっかり勉強もしながら)最後まで楽しみたいと思います。そして、最後に言いたかったことは、ドイツはやっぱりビールとポテトとソーセージの国です!



ポツダムの研修生たちです。漢字で名前を書いてあげました。

AWARDS

所属	職・氏名	受賞名・機関	受賞項目	受賞日
都市基盤安全工学 国際研究センター	教授 目黒 公郎	土木学会国際活動奨励賞 (社)土木学会	土木技術の発展に独創性をもって寄与し、 国際貢献への活動が今後とも期待される日 本人技術者	2007. 5.25
情報・エレクトロ ニクス系部門	准教授 橋本 秀紀	フェロー称号 (社)計測自動制御学会	研究、開発、教育啓蒙・管理運営などの活 動を通じた計測自動制御学会の関与する分 野の学問技術の発展への功績に対して	2007. 9.19
都市基盤安全工学 国際研究センター	助教 大原 美保	第26回日本自然災害学会学術発表優秀賞 (社)日本自然災害学会	人口減少社会における活断層近傍の土地利 用誘導策に関する一考察	2007. 9.25
機械・生体系部門	教授 須田 義大	創立110周年記念 会員功労者賞 (社)日本機械学会	永年にわたり事業活動に参画し、本会の発 展のために多大な貢献をした功績に対して	2007.10.26
機械・生体系部門	教授 藤田 隆史	原子力安全功労者表彰 経済産業省	原子力の安全に関する多大の貢献	2007.10.31

■学生部門

所属	職・氏名	受賞名・機関	受賞項目	受賞日
都市基盤安全工学 国際研究センター 桑野研究室	大学院学生 Ruta Ireng WICAKSONO	9 th International Summer Symposium of Japan Society of Civil Engineers 優秀講演者 (社)土木学会	SMALL STRAIN STIFFNESS OF CLEAN SAND AND GRAVEL BASED ON DYNAMIC AND STATIC MEASUREMENTS	2007. 9.18
都市基盤安全工学 国際研究センター 目黒研究室	大学院学生 Navaratnarajah SATHIPARAN	第26回日本自然災害学会学術発表優秀賞 (社)日本自然災害学会	Parametric Study on Diagonal Shear Behavior of Masonry Wall Retrofitted by PP-band Mesh	2007. 9.25
基礎系部門 田中肇研究室	大学院学生 川崎 猛史	Best Presentation Award for Student The 5th International Workshop on Complex Systems	Link between Vitrification and Crystallization in Two-Dimensional Polydisperse Colloidal Liquid	2007. 9.27

PRESS RELEASE

■生研関連新聞記事

以下の各紙に掲載された生産技術研究所の研究成果に関する記事について紹介しています。

詳細は、総務・広報チームにお問い合わせください。

・読売、朝日、毎日、日経、産経、日刊工業、日経産業

なお、その他の新聞に掲載されたものを本欄に記載することを希望される場合は、総務・広報チームへご相談ください。

最 新 記 事		
・ 最高性能の水中レーダー 犯罪対策・海難救助に	[10/30 東京大学新聞 1面]	【浅田研究室】
・ 東大/東北大研究チーム カーボンナノチューブ 穴だらけ、応用阻む品質	[10/29 朝日新聞28面]	【福谷研究室】
・ 東北大 欠陥ない単層CNT バルクで合成成功 半導体など産業応用近づく	[10/25 化学工業日報 4面]	【福谷研究室】
・ 電気駆動の車、増加中 環境問題・公害対策に期待	[10/23 東京大学新聞]	【堀研究室】
・ 広域の改訂探査に成功 サツマハオリムシを観察	[10/23 東京大学新聞 1面]	【浦研究室】
・ 通信に最適な光の波長実現 量子暗号通信実用化へ前進	[10/23 東京大学新聞 1面]	【荒川研究室】
・ 東大と海上保安大 水中探査レーダー開発 3種の音波で高精度 不審物発見に活用 [10/5 日経産業新聞(日経テレコン21)10面・日刊工業新聞29面・東京新聞3面・日本経済新聞15面]		【浅田研究室】
・ 東京大学生産技術研究所 先端工学の公開講座 [9/25 日経産業新聞(日経テレコン21)11面 10/3 日刊工業新聞23面]		【生研公開講座イブニングセミナー】
・ 東大など 海中ロボで鹿児島湾海底調査 熱水チムニー多数発見 [9/21 日刊工業新聞27面・毎日新聞26面・日本経済新聞15面・日経産業新聞(日経テレコン21)11面・朝日新聞14面 9/25 東大新報1面 10/2 東京新聞25面]		【浦研究室】
・ 東大・富士通研究所 1.55マイクロメートル帯の単一光子発生 電流注入で成功 量子暗号通信に道 [9/19 化学工業日報5面・日刊工業新聞29面・日経産業新聞(日経テレコン21)9面・電気新聞4面]		【荒川研究室】
・ 半導体進化論 イノベーター列伝=第6部 フロンティア再び(4) 格子からドットへ 量子デバイスを開拓 [9/4 日経産業新聞(日経テレコン21)11面]		【荒川研究室】

INFORMATION

■年末年始スケジュール

●建物管理

平成19年12月29日(土)から平成20年1月3日(木)までの年末年始の期間、以下の通りとなりますので、ご注意ください。

- *正門、東門、西門は通常の土曜日、日曜日と同様に閉鎖されます。磁気カードなしの出入りはできません。
- *電話については、ダイヤルインですので通常通り使用可能です。
- *所内のレクリエーション施設(テニスコート、卓球場(BeB04))の使用はできません。
- *緊急事態が発生しましたら、防災センター(内線119または56099)へご連絡ください。

●電子計算機室

電子計算機室設置のワークステーション、メール等各種サーバ及びネットワークは、年末年始を通して利用できます。ただし、トラブルがあった場合は、1月4日(金)まで対処できませんので、あらかじめご了承ください。

●図書室

図書室は12月28日(金)から1月6日(日)の間、閉室いたします。詳細につきましては、図書室ホームページでご確認ください。図書室ホームページ
URL : <http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/tosho/>

CAMPUS TOUR

生研厚生施設その2: スポーツジム、またの名を卓球場@B棟地下1階

まさか生研に卓球場があるとは! でもどこに? そんな不安感とちょっとした期待感を胸に、小倉研メンバー(小倉准教授含む)はこぞって卓球をしに出かけました。

まず、事務室の総務・広報チーム(総務)へ。いつも会議室の鍵を借りるように卓球場の鍵を借りに行ったところ、ない。「卓球場の鍵は厚生係(Cw-202)の方ですね。」と丁寧に案内される。出足からつまづいた。不安一杯。鍵貸出リストに記名。リストには、中国からの留学生であろう方々の名前がずらり。「そうか、ここは中国学生にはオアシスなのかも。」鍵は11時30分ごろから借りられます。

B棟を地下へと降りてゆくと、ドライエリアを挟んで反対側に、「極限〇〇研究施設」「材料△マセンター」などと並んで、ありました。Be-B04。小さい札に「厚生健康委員会委員長(火元責任者)」。パッと見たところ、入口は全く判別不能。

鍵をあげ、真っ暗な部屋の電気をつけると、意外に広い空間がそこにはありました。手前には、トレーニングルームにあったような(生研ニュースNo.107(2007年8月号)のCampus Tour参照!)筋力トレーニンググッズが並んでいます。如何にも“自前のシューズ”の中から、公的と思われるスリッパへと履きかえて中へと進むと、そこには卓球台がすでに4台並んでいました。「ラケット、ピンポンは持参かな。」と不安がってもいましたが、山のようにラケットが積まれている箱の横に、ピンポンで埋め尽くされたバケツ。公式球として知られる3つ星ピンポンだ。これは本格的。

広い空間、白熱したラリー。
初心者も国籍も問わず楽しめます。

さっそく、やってみた。きちんと囲いもあり、下手な我々がピンポンをあちこちへと飛ばしても、大丈夫。久しぶり感もあり、ついついはまる。みんなだんだん調子に乗ってきた! (蒸し暑さゆえ) ほとばしる汗!! (遠い) 青春!!!

あっという間に時間がたち、13時になったら終了。鍵を返さなければなりません。卓球場にあるホワイトボードには、いまもきっと存続している卓球サークルの活動記録がありました。マイシューズを履いて、夜な夜な卓球に勤しんでいる方も、意外と多いのかもしれませんが。卓球場は原則12時から13時に一般公開とのことでしたが。

ピンポン、温泉卓球、のように、初心者でもそこそこ楽しめる卓球。短い時間ではありますが、ちょっとした日頃の鬱憤晴らし、ストレス解消、コミュニケーション増進に持ってこい。皆さんも一度、小気味のよい音を立てながらラリーしませんか?

(物質・環境系部門 小倉研究室一同)

(瀧澤健介、渡部景一郎、川上功太郎、洪 在亨、山口太地、KK.Cheralathan)





路上駐車は悪者か？

都市基盤安全工学国際研究センター
講師 田中 伸治

車を運転する人で、路上駐車をしたことがない人はおそらくいないのではないだろうか。昨年より改正道路交通法が施行され、違法駐車取締りが強化された。違法な路上駐車は都市内の渋滞の主要な原因になっており、今回の改正はその改善のための大きな前進であるといえる。

渋滞や事故を減らすという観点からは、駐車は道路上から全て排除するのが一番よいことは間違いない。そのため現在の道路交通政策でも、「道路は走行空間であり、駐車は道路外で処理すべき」とされており、都市内はほぼ全面駐車禁止規制が行われている。しかし世の中には、路上に駐車することが必要な車もある。宅配便のように短時間駐車による荷物の積下しを繰り返す物流車両は、いちいち路外駐車場に停めては業務の効率が著しく低下する。そうした車は依然として路上に違法駐車を行わざるを得ないのが実情であり、そしてその車が運ぶ荷物によって、我々の生活や都市も支えられている。

そこで我々は「目的や時間・場所を限定した上で、路上にも駐車を認めるべきだ」との考えに立ち、図1のような路上駐車スペースを提案している。これは、交通への影響が大きい交差点付近は十分なスペースを確保した上で交差点と交差点の間に路上駐車可能な場所を設けるもので、かつ、歩道の切り欠きのような工事を必要とせず低コストで実施可能なことが特徴である。これにより、渋滞や事故のリスクを増やすことなく、社会・経済活動上のメリットを享受することが可能になる。また、真に影響の大きい場所での違法駐車を減らすためにも、現状の全面駐車禁止規制ではなくこのよ

うに規制にメリハリをつけて差別化することは有効である。

この路上駐車スペースの実現可能性について、円滑性と安全性の観点から評価を行った。円滑性については、交差点から駐車帯まで理論上必要なクリアランス距離を解析的に求めるとともに、路上駐車回避行動を組み込んだ交通シミュレーションにより交通処理能力をチェックした。一方安全性については、図2に示すような状況の中を被験者に運転してもらうドライビングシミュレータ実験¹⁾を行い、路上駐車スペースを設置した場合の方が現状の違法駐車状態よりも安全性が高いことを、走行データおよびアンケート回答から確認した。その他、これを有効に機能させるための課金や取締り方法の検討、違法駐車をする利用者の認知・判断メカニズムの解明などについても研究を進め、走行車両と駐車車両が共存した、秩序ある交通状態を実現したいと考えている。

違法駐車に限らず、交通問題は我々の行動の結果発生する、非常に身近な問題である。これは見方を変えれば、我々一人ひとりが協力して適切に行動すれば、大方の交通問題は解決してしまうともいえる。ただ難しいのは、一人ひとりのユーザからは問題の原因や周りへの影響が見えにくい点にある。これを解明して人々に分かりやすく伝え、豊かな交通社会を実現するための研究を今後も続けていきたい。

- 1) 実験に際して、須田研究室で開発されたドライビングシミュレータを利用させていただいた。ここに記して御礼申し上げたい。

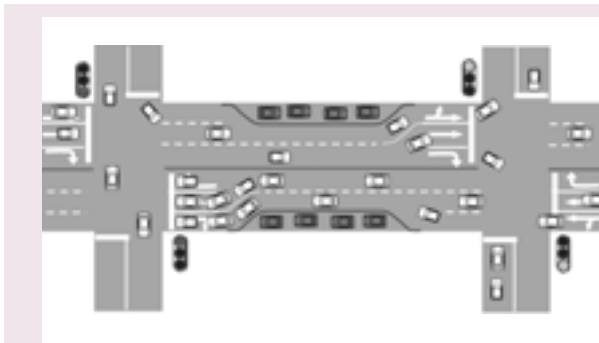


図1 提案する路上駐車スペース



図2 ドライビングシミュレータ実験の画面

■編集後記■

図書館は利用形態が変わりつつあります。今では常連さんがPCを持ち込んで勉強したり必要な分だけコピーをとったり。キャンパスのどこにあるかすら知らない方も多いのでは。昔はページを繰って最新雑誌を閲覧したり。そんな時間が貴重でした。またそういった時、探していた文献の隣に面白い記事を見つけたりしました。それが後に重要参考論文になったりするこ

とは稀ではなかったように思います。まさに、隣に発見がありました。webでキーワード検索をすると、欲しかった論文のヒット率は高いですが、そういった邂逅はあり得ません。聞いた話では、六本木時代は図書館は中央に位置したとのこと。今ではその意味と重要性を感じます。
(小倉 賢)

■広報委員会 生研ニュース部会
〒153-8505 東京都目黒区駒場4-6-1
東京大学生産技術研究所

☎(03)5452-6017内線56017、56018
■編集スタッフ
竹内 昌治・美谷周二朗・高宮 真
小倉 賢・田中 伸治・三井 伸子
E-mail : iisnews@iis.u-tokyo.ac.jp
生研ホームページ
<http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/>